

家庭医療べんきょう会

	代表者		巴	悠記 (医学 B4 年)		
構成員	山本	優里 (医学 B6 年)	小林	芙美 (医学 B5 年)	原賀	健一 (医学 B5 年)
	藤井	由佳 (医学 B4 年)	伊藤	渉 (医学 B3 年)	松尾	美結 (医学 B3 年)
	大崎	崇正 (医学 B3 年)	田中	理穂 (医学 B2 年)	前田	七海 (医学 B2 年)
	山路	創一郎 (医学 B2 年)	伊藤	沙妃 (医学 B1 年)	桂	寧々 (医学 B1 年)
	重本	航輝 (医学 B1 年)	豊川	絢子 (医学 B1 年)	深堀	洋佑 (医学 B1 年)
	福原	茜 (医学 B1 年)	小山	恭奈 (医学 B1 年)	鈴木	結夢 (医学 B1 年)

1. はじめに～家庭医療べんきょう会について～

私達「家庭医療べんきょう会」は、地域医療や総合診療、多職種連携に関心を持つ学生が自主的にこれらについて学ぶサークルであり、構成メンバーは山口大学と山口県立大学の医学生・看護学生である。本格的な活動開始から2年強の新しい組織であるが、月1～2回程度の定期的なイベントを企画・運営し、精力的に活動している。昨年度までは、学生主体のワークショップや地域医療・総合診療の分野において第一線でご活躍されている先生方をお招きしての講演会等、学内でのイベントが中心であった。今年度は従来の活動に加えて、「積極的に（大学の）外に出ていき、地域と関わる」ということを基本テーマに掲げ、①へき地診療所実習、②地域住民、行政職、医療従事者、医学生・看護学生によるワールドカフェ形式の意見交換会、③地域医療・総合診療分野のエキスパートによる講演会・セミナーの3つを柱として活動計画を立案し、活動を行った（図1）。

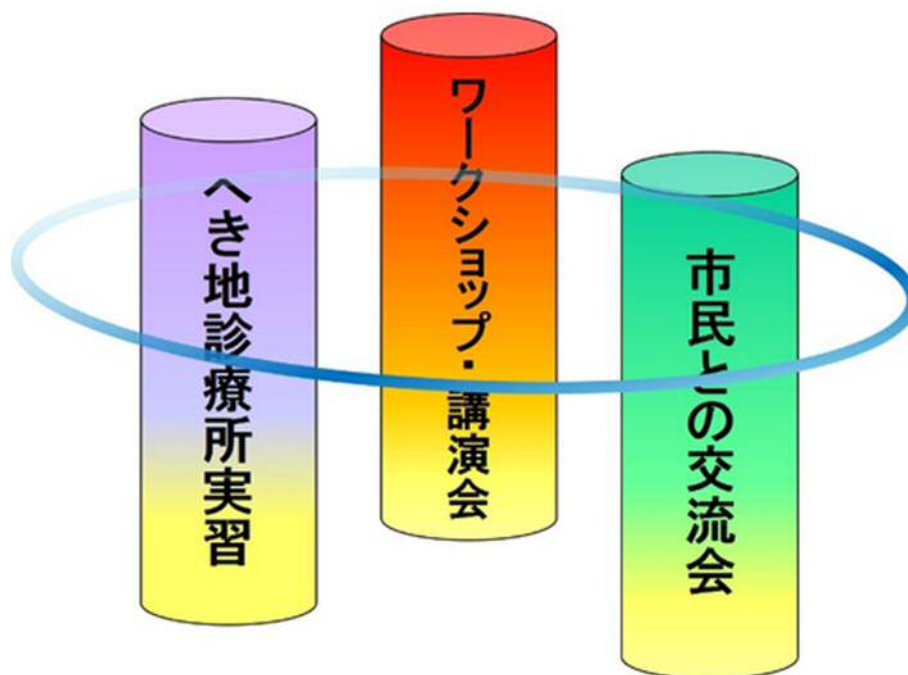


図1 家庭医療べんきょう会 2016 年度活動方針

2. 2016 年度の活動の概要

2016 年度の主な活動実績を図2に示す。上記の3つの柱に従来の学生主体のワークショップを中心とし、さらにこれらを企画・運営する上で必要な知識や経験の体得が可能であると考えたもの等、6つのイベントの主催、3つのイベントの共催、5つのイベントへの視察・参加を行った。地域住民や医療従事者等の学生以外の方も対象とする規模の大きなイベントである3つの柱のイベントについては、年度終盤の2月および3月の開催とし、他団体主催のイベントへの視察・参加や医学部附属病院総合診療部との共催等を事前に踏まえた。これにより、規

模の大きな3つの柱のイベント運営に際して必要な知識やノウハウを体得することができ、これらのイベントをほぼ企画段階の理想的な形で主催・運営することができた。以下に2016年度の主な活動について個別に記す。

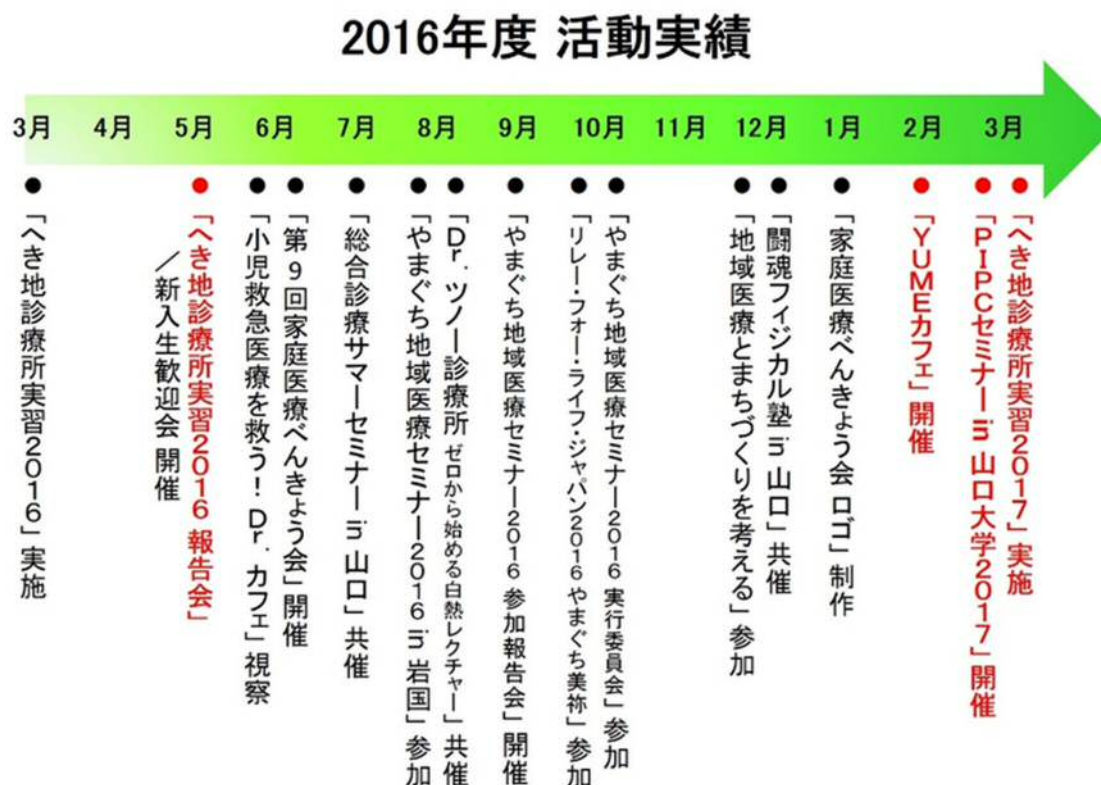


図2 家庭医療べんきょう会 2016 年度主な活動実績

3. へき地診療所実習 2016 報告会・新入生歓迎会

2015 年度より山口大学医学部医学科3 年次のカリキュラムから地域医療実習がなくなり、医学科の学生が山口県内の地域医療の現場を体験する機会は大いに失われた。そこで、家庭医療べんきょう会のメンバーからの「離島医療を体験してみたい」という意見と併せて「へき地診療所実習」を企画することとした。山口県立総合医療センター・へき地医療支援部の原田昌範先生にご支援頂き、地域医療振興協会山口県支部の後援、萩市地域医療推進課の協力の下、2016 年3 月に1 泊2 日の日程で萩市大島（萩市国民健康保険大島診療所）、平郡島（柳井市立平郡診療所）、および萩市内の山間部の診療所（萩市国民健康保険川上診療所、むつみ診療所、福川診療所、須佐診療センター）にてへき地医療の現場を体験し、現状を理解する「へき地診療所実習」を行った。



図3 へき地診療所実習 2016 の様子
左：むつみ診療所，右：平郡診療所

実習終了後、本実習で得た学びを互いに共有し、また山口県の地域医療の現状やそれに対する学生の感想・意見を家庭医療べんきょう会以外の山口大学生に知ってもらう機会を設けることを目的として、「へき地診療所実習 2016 春報告会」を 5 月 17 日に山口大学小串キャンパスにて開催した。その結果、当初の予想を上回る 30 名以上の山口大学の医学生・看護学生、山口県立大学の看護学生の参加があった。



図 4 へき地診療所実習 2016 春報告会（5 月 17 日、於：山口大学小串キャンパス）

4. リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2016 やまぐち美祢

10 月 1～2 日に、日本対がん協会リレー・フォー・ライフ・ジャパンやまぐち実行委員会の主催で「リレー・フォー・ライフ・ジャパン（RFLJ）2016 やまぐち美祢」が美祢市の秋吉台国際芸術村で開催され、ボランティアスタッフとして参加した。本イベントは、がん患者・がんサバイバーの方とご家族への支援を呼びかけるチャリティーイベントである。現在までに 25 か国で開催されており、日本でも去年は 47 か所で開催されているイベントであるが、山口県では今回が初の開催であった。臨床実習が始まる前の時期であり、これまでに直接がん患者の方やがんサバイバーの方のお話を聞く機会はなかったが、「2 人に 1 人はがんになり、3 人に 1 人ががんで亡くなる」と言われる現在の医療状況の中で、上記のへき地診療所実習においても「がん患者の会」の話題が挙がり、地域医療の現場においてもがんと対峙することからは逃れられないことを実感し、医師・看護師を志す上で実際にがん患者の方の生の声を聴くことは大切であると考え、家庭医療べんきょう会の有志メンバーで参加した。

「RFLJ 2016 やまぐち美祢」の実際のイベント内容としては、がん患者や家族への支援を呼びかけて、チームごとに夜通し歩き通す「リレーウォーク」、がん患者やがん克服に向けたメッセージが書かれた紙袋にキャンドルを入れた提灯のようなものを会場に灯す「ルミナリエ」、フラダンスやミュージックショー、「がんにはできないこと」の詩の朗読、がんサバイバー＆ケアギバートークショー、「がんについて思うこと～皆で支え合おう、語りつながろう！～」をテーマとしたワークショップ、がんとの向き合い方についての講演等、非常に豊富な内容で充実した 2 日間であった。ワークショップでは、私達家庭医療べんきょう会のメンバーが各班のリーダーを務め、各班でグループワークを行った。出された意見やアイデアを模造紙にまとめてポスターを作成し、発表し合い情報共有を行った。がん患者の方、がんサバイバーの方、医師、薬剤師等の医療従事者の方といった多様なメンバーの意見を聞くことができ、さらにリーダーを担わせて頂けたことは非常に貴重な経験となった。

会場に直接足を運ばれた方はがんサバイバーの方がほとんどであり、お話をさせて頂いた方は、皆さんががんを克服され、パワフルでとても明るい方ばかりであった。その一方で、イベント会場に来られず、ルミナリエに思いを託された方のメッセージからは、まだまだがんは生命を脅かす病であり、患者さんにご家族に深い悲しみを与える病であることを実感した。



図5 リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2016 やまぐち美称の様子

左上：リレーウォーク，右上：ルミナリエ

左下：HOPE（セレモニー），右下：ワークショップ

5. YUME カフェ

3つの活動方針の内の1つである「地域住民，行政職，医療従事者，医学生・看護学生によるワールドカフェ形式の意見交換会」を「YUME カフェ（Yamaguchi Ube MEDical ワールドカフェ）」と題して，2月5日に山口大学医学部附属病院総合診療部，山口県医師会，宇部市医師会の後援の下開催した。これまで，地域住民と医療従事者の間の接点は，診療の他には市民公開講座という形式で，医療従事者が市民に現在の医療のトピックスや最近の知見を説明するというものが主であった。このような形式では，質疑応答の時間を除き，基本的には医療従事者側から市民側への一方向であり，市民が医療従事者と十分に意見を交わすということは困難である。そこで，「市民が医療従事者および行政職員と和気藹々とした雰囲気の中で医療や医療に関する市・県の取り組みについて自由に質問し，意見を交換することができる機会を設け，医学生・看護学生が両者の間の橋渡し役を担う」というコンセプトの下企画を進めた（図6）。テーマとしては，地域全体としての問題であり，かつ市民の関心も高いと考えられる認知症とした。



図6 YUME カフェのコンセプト（左）および案内（右）

YUME カフェ当日は、宇部市民・山陽小野田市民の方々、行政職、医療従事者、医学生と職種・立場の異なる 50 名近くの方々にご参加頂いた。医療従事者は、医師、(認知症看護認定)看護師、薬剤師、臨床心理士の方にお集まり頂いた。さらに、参加した医学生の中には、歯科医師や理学療法士のバックグラウンドを有する学士編入生もあり、非常に多様な医療職が集まった(図 7)。また、医師も、神経内科、脳神経外科、精神科、総合診療科とご専門の異なる 8 名の医師にお越し頂き、多様な視点からの専門的なご意見を伺うことができるように注力した。当日のプログラムは、①公益社団法人認知症の人と家族の会山口県支部代表である、山口大学医学部附属病院神経内科学講座・准教授の川井元晴先生の認知症講演(「ひとごとではない認知症のお話」)、②宇部市健康福祉部高齢者総合支援課の職員の方からの宇部市の認知症施策の説明、③認知症についてのワールドカフェ(意見交換会)であった。

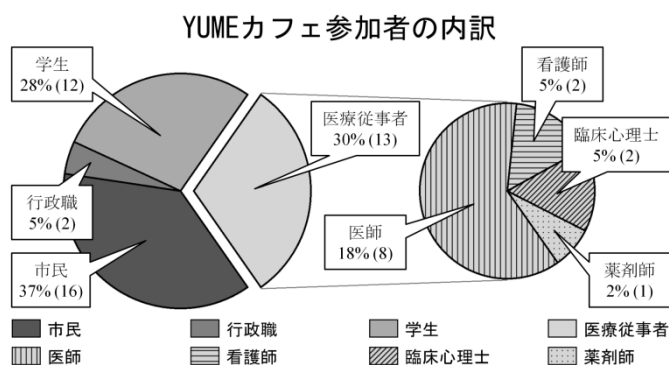
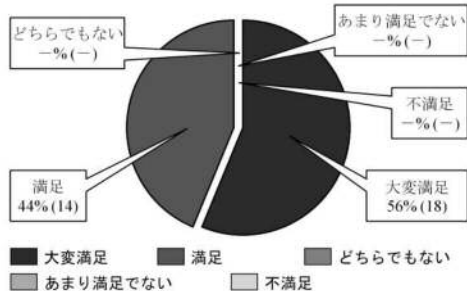


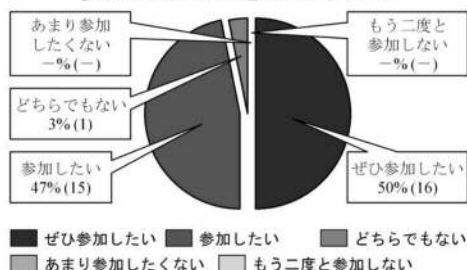
図 7 YUME カフェ参加者の内訳(左)と当日の会場の様子(右)

認知症という疾患および宇部市の施策について理解し、さらに認知症に関心を持つ方や実際に認知症の家族を自宅で介護しておられる方と認知症について語り合い、非常にリアリティーのある学びの多い貴重な機会となった。会終了後に参加者にアンケートを行った結果、「YUME カフェに参加して満足」との回答が 100%、「また YUME カフェが開催されたら参加したい」との回答が 97%であり、参加者からの評価は良好であった。また、YUME カフェ当日には宇部日報社の記者の方が取材にお越し下さり、YUME カフェについて記事が宇部日報に掲載された(図 8)。

YUMEカフェにご参加頂いた感想は？



またYUMEカフェが開催されたら参加したいと思いますか？



認知症テーマに意見交換

YUMEカフェ
市民や医療従事者が気軽に健康について話し合う「YUMEカフェ」は6日、山口小ホールで開かれた。認知症をテーマにした意見交換会が行われ、参加者からは「認知症は身近な問題で、早期発見の重要性が改めて認識された」という声が上がった。山口大学医学部附属病院神経内科学講座の川井元晴先生が「ひとごとではない認知症のお話」と題して講演し、早期発見の重要性や、認知症の予防法について話した。川井先生は「認知症は、余りにも身近な問題で、早期発見の重要性が改めて認識された」という声が上がった。山口大学医学部附属病院神経内科学講座の川井元晴先生が「ひとごとではない認知症のお話」と題して講演し、早期発見の重要性や、認知症の予防法について話した。川井先生は「認知症は、余りにも身近な問題で、早期発見の重要性が改めて認識された」という声が上がった。

図 8 YUME カフェの参加者アンケート結果(左)および YUME カフェの記事(右)『宇部日報』2017.2.6 朝刊)

6. PIPC セミナー・ベーシックコース in 山口大学 2017

都市部以外の地域医療の現場では、精神科専門医が不足しており、内科医や総合診療医などの精神科を専門としない医療者がうつ病、パニック障害、不安障害、認知症、不眠症等の精神疾患患者の対応を求められる場合も多い。こうした背景から、3つの活動方針の内の1つである「エキスパートによる講演会・セミナー」として、3月25～26日に「PIPC セミナー・ベーシックコース in 山口大学」を山口大学小串キャンパス・霜仁会館にて、山口大学医学部附属病院・総合診療部の後援、PIPC 研究会の協力の下開催した。PIPC (Psychiatry In Primary Care) は、米国内科学会における教育セッションのために創始されたものであり、内科医等の精神科を専門としない医師が自らの専門領域において適切な精神科的対応ができるようになるための知識やスキルを提供する学習プログラムである。

講師・ファシリテーターとして、PIPC 研究会より信愛クリニック理事長の井出広幸先生、みよし市民病院内科部長・健診科部長の木村勝智先生、宮崎医院院長の宮崎仁先生の3名がお越し下さり、アシスタントとして、尾中病院内科・放射線科の山本千恵子先生、東京医科大学救急・災害医学分野兼任教授の田中博之先生、日本歯科大学附属病院心療歯科診療センターの加藤雄一先生の3名にお越し頂いた。さらに、スーパーバイザーとして、精神科専門医である山口大学大学教育機構保健管理センター准教授である松原敏郎先生にお越し頂いた。医師、看護師、臨床心理士、保健師、精神保健福祉士、医学生・看護学生等、2日間でのべ70名を超える方にご参加頂いた。

プログラムとしては、25日にはプレセミナーとして、大学教育機構保健管理センター准教授の松原敏郎先生より「地域医療における注目すべき精神疾患について」という演題でご講演頂いた。26日には、PIPC 研究会の井出広幸先生、木村勝智先生、宮崎仁先生によって PIPC セミナー・ベーシックコースが行われた。プレセミナーでは、山口県におけるプライマリ・ケア医の精神疾患診療の実態、プライマリ・ケア医が遭遇しやすい精神科疾患、精神科医療の広がり等について学んだ。また、PIPC セミナー・ベーシックコースでは、実践的な精神疾患診療ツールである「MAPSO (Mood/Anxiety/Psychoses/Substance induced/Organic/Other) システム」、自殺の予防対策、うつや不安の薬物療法の基本、精神科専門医との連携等についてワークショップ形式で学んだ。精神科疾患についての概論、地域医療現場での精神科疾患の現状といった基礎知識から、現役の医師、看護師、臨床心理士等の医療従事者の方々とのグループワークによる実践まで横断的に学ぶことができ、非常に濃密な2日間であった。



PIPCセミナー学校へ行こうプロジェクト2017
 学生・研修医・全ての医療職のための
PIPCセミナー・ベーシックコース in 山口大学 2017
3.25 SAT 26 SUN

PIPC (Psychiatry In Primary Care) は、米国内科学会 (ACP) における教育セッションのために創始されたもので、内科医などの精神科を専門としない医師が自らの専門領域において適切な精神科的対応ができるようになるための知識やスキルを提供する学習プログラムです。ベーシック・コースでは、心療にこれから取り組もうとする初心者を対象に、医学生/研修医にとってなじみの薄い精神疾患に関する エッセンスを、現場で出会う頻度を考慮して絞込み、実戦で役立つ 診療ツールとしてまとめた「MAPSO」システムについて学びながら、具体的な問診方法、患者さんの長い話をコントロールする方法、自殺のブロック法、うつや不安の薬物治療の基本などについて身につけることができます。精神医学を全く学んだことのない学生にも十分理解できる内容であり、ワークショップ形式で、楽しく学べるセミナーですから、どうぞお気軽にご参加ください。

前夜祭・プレセミナー	PIPCセミナー・ベーシックコース	主催
2017年3月25日 (土) 18:00～19:00	2015年3月26日 (日) 9:00～16:00	信愛医療センター
会場 山口大学医学部 霜仁会館3階多目的室	会場 山口大学医学部 霜仁会館3階多目的室	後援
演題 地域医療における注目すべき精神疾患について (仮)	ファシリテーター 井出広幸 信愛クリニック	山口大学おもしろプロジェクト
講師 松原敏郎先生 山口大学大学教育機構保健管理センター准教授	木村勝智 みよし市民病院 内科	山口大学医学部附属病院 総合診療部
会費 無料	宮崎 仁 宮崎医院	協力
プレセミナー終了後懇親会 (懇事前登録・会費制) を予定しています	スーパーバイザー 松原敏郎 山口大学大学教育機構保健管理センター准教授	PIPC研究会
	会費 社会人2,000円・学生500円 昼食代含む	対象
		心療に関心を持つ医学生・医療系学生、研修医、医師、看護師、その他職種
		参加申し込み・お問い合わせ先
		山口大学医学部附属病院・総合診療部
		担当: 原田千葉
		general@yamaguchi-u.ac.jp

図9 PIPC セミナー・ベーシックコース in 山口大学 2017 の案内



図 10 PIPC セミナー当日の様子

上中：プレセミナー（3月25日），下：PIPC セミナー・ベーシックコース（3月26日）

7. へき地診療所実習 2017

昨年度に続き、今年度も3つの活動方針の1つに位置付けた「へき地診療所実習 2017」を山口県立総合医療センター・へき地医療支援部の原田昌範先生にご支援頂き、地域医療振興協会山口県支部の後援の下実施した。実習施設としては、離島の萩市大島（萩市国民健康保険大島診療所）と萩市見島（萩市国民健康保険見島診療所）、山間部の周南市鹿野にて行った。

この内、周南市鹿野での実習は「鹿野力いいトコ発見委員会」と題して、明るく元気な鹿野をつくる会および鹿野婦人会にもご協力頂き、学外協力者である山口県立大学看護栄養学部看護学科の2年生4名が、3月30日から2泊3日の日程で行った。実習のスケジュールとしては、30日の午前には婦人会総会での講演会（「地域医療とまちづくりへの思い～鹿野力いいトコ発見委員会～」講師：山口県立総合医療センター原田昌範先生）とコミュニティ・カフェ交流会を開催し、午後には健康づくり推進課見学や鹿野地区でのフィールドワークを行い、夜は鹿野の地域住民の方のお宅にてホームステイさせて頂いた。31日の午前には鹿野ファーム、特別養護老人ホーム

のやまなみ荘，鹿野博愛病院での実習を行い，午後は鹿野診療所，障害者支援施設の鹿野学園にて実習を行い，夜にはコミュニティ・ナースプロジェクト1期生である看護師の宮本裕司さんに「ナース×まちづくり～コミュニティ・ナース育成プロジェクト～」の演題でご講演頂いた。最終日の4月1日には，「コアプラザかの」にて本実習の関係者だけでなく鹿野の地域住民の方々にもご参加頂き，報告会とワークショップを行った。

この「鹿野力いいトコ発見委員会」は，①へき地診療所実習，②地域住民との交流・意見交換会，③エキスパートによる講演会という今年度の活動方針の3つの柱が全て盛り込まれた，まさに今年度の活動の締め括りとなるような取り組みとなった。この3日間の実習中，山口朝日放送（yab）の方が同行して取材を受け，実習の様子が4月3日の「Jちゃんやまぐち」内で放送された（図11）。なお，離島で実習を行った班と合わせて，今年度も5月に山口大学小串キャンパス内にて，山口大学生に向けてへき地診療所実習2017の報告会を開催予定である。



図11 鹿野力いいトコ発見委員会（へき地診療所実習2017 in 鹿野）についてのTV放送（山口朝日放送「Jちゃんやまぐち」2017.4.3 画像には修正を加えています）

上段右および中段左：鹿野診療所での実習の様子，中段右：フィールドワークの様子
下段左右：最終日の報告会の様子

8. その他の活動

上述した「5. YUME カフェ」を開催するに当たり，ワールドカフェ形式のワークショップの実際の流れ，役割，人員配置，必要な備品，開催の段取り等を含めた運営方法を学ぶために，6月5日に山口市で開催された「小児救急医療を救う！Dr. カフェ（主催：すこやか育ち隊）」の視察・ボランティアスタッフとしての参加を行った。

また，「5. PIPC セミナー・ベーシックコース in 山口大学2017」を開催するに当たり，規模の大きなセミナーの運営方法を学ぶために山口大学医学部附属病院総合診療部と「総合診療サマーセミナーin 山口」（7月30日），「開魂フィジカル塾 in 山口」（12月10日）を共催させて頂き，8月27～28日には「おもクロ！Choco Conference」との共催で角島大浜キャンプ場にて「Dr. ツノー診療所知識ゼロから始める！白熱レクチャーin 角島」を開催した。

「6. へき地診療所実習 2017」の「鹿野力いいトコ発見委員会」の実施においては、12月4日に周南市鹿野公民館にて行われた「地域医療とまちづくりを考える（主催：明るく元気な鹿野をつくる会、共催：鹿野地区社会福祉協議会・鹿野ブロック人権教育推進協議会・輝きクラブ周南鹿野支部・公益社団法人地域医療振興協会山口県支部、後援：周南市）」に参加したことがきっかけとなり、実施に至った。

これまでに行ってきた学内の学生向けのセミナーとしては、山口大学医学部附属病院総合診療部・准教授の齋藤裕之先生を講師にお招きし、6月28日に山口大学小串キャンパスにて「家庭医療総論」というタイトルでセミナーを開催した。家庭医療べんきょう会以外の山口大学の学生にも広く案内し、25名を超える参加があった。



図 12 総合診療部・齋藤裕之先生「家庭医療総論」の様子

家庭医療べんきょう会の学内・学外への情報発信力を向上させることを目的として、家庭医療べんきょう会のロゴの制作にも取り組んだ。オダムラデザイン様と打ち合わせを行い、デザイン案に対してOB・OGを含む家庭医療べんきょう会メンバー内で投票を行った。投票の結果選ばれたデザイン案を元に、さらに調整し、バリエーションを追加した上で最終投票を行い、ロゴデザインが決定・完成した（図 13）。今後、家庭医療べんきょう会を学内・学外ともにより一層周知できるようにこのロゴを有効活用していく。



図 13 家庭医療べんきょう会ロゴ

9. 総括

今年度当初に立案し、「山口大学おもしろプロジェクト」に申請した活動計画である、①へき地診療所実習、②地域住民、行政職、医療従事者、医学生・看護学生によるワールドカフェ形式の意見交換会、③地域医療・総合診療分野のエキスパートによる講演会・セミナーの3つの柱に沿って活動を行い、これらを全て実現することができた。さらに、「積極的に（大学の）外に出ていき、地域と関わる」という基本テーマを軸とした+αの活動を実施することができた。これらの活動の結果として、組織としての企画力、実行力、人脈、セミナー運営のノウハウ等を大いに培うことができたと考える。「山口大学おもしろプロジェクト」に採択された際の「選考委員会からの助言と要望」で寄せられた「なぜこうしたことを大学生がやるのかという必然性」について、意識しながら活動に取り組んできた。「YUME カフェ」終了後のアンケートでは、「ワールドカフェは病院主催になるとどうしてもかたくなりますし、変な意味で上下関係（医療者・患者・市民関係）にもなりやすいため、学生主催という形はとてもよいと思いました。」「学生は中立的な立場であり、多職種が集まりやすいかもしれない。」「医学生、看護学生が地域や生活に目を向けて取り組んでおられることは、診断・治療はもちろん、人の生活の視点をもって活躍してくださるので頼もしく思っています。将来が楽しみです。」とのコメントを頂いた。「鹿野力いいトコ発見委員会」の報告会においても、地域住民の方から「外から若者が来てくれると皆が生き活きする。鹿野に来てくれてありがとう。」とのコメントを頂いた。これらのコメントより、「大学生が実施する必然性」の一部を見出すことができたように思う。

また、プロジェクト構成員の数もプロジェクト申請当初の14名（山口大学9名・山口県立大学5名）から27名（山口大学19名・山口県立大学8名）に増員することができた。今後は、小学生から高校生に対する地域医療に関する啓発活動や、地域医療に関する中長期的な活動にも取り組んでいく。また、地域再生・まちおこしに対して医療系以外の学生とも協力して取り組む企画を立案し、実施することも望ましいと考える。

課題としては、定期的な月次ミーティング以外の活動（特に後期）において、構成員の参加率が過半数を超えることが少なかったことが挙げられる。上述のように家庭医療べんきょう会の構成員の主なメンバーは山口大学医学部の学生であるが、山口大学医学部の学生は部活動加入率が高く、家庭医療べんきょう会と他の部活を兼部している者が大半である。山口大学医学部の部活動は極めて活発であるため、スケジュール調整が困難であり、構成員全員が参加できるような日程調整は現実的に難しいと思われる。また、家庭医療べんきょう会の山口県立大学所属のメンバーに対しては、規則上「山口大学おもしろプロジェクト」の予算を直接運用することができないため、山口県立大学のメンバーに実習等の旅費を支援できるよう他の助成金の獲得を検討することも必要だと考える。

10. おわりに

3つの柱のそれぞれから派生した活動にも積極的に取り組むことで、学生だけでなく、医療従事者や行政職、地域住民等との新たな出会いが生まれ、それによって新たな活動が生まれるという連鎖・好循環を実感した。この連鎖を維持し、家庭医療べんきょう会の活動がより地域医療の向上に寄与できるように活動方針および企画を立案することが重要であると考え。来年度以降も今年度のアクティビティーが維持され、より向上するように幹部の交代後も上級生と下級生の連携を密にし、今年度培った組織力をより一層強いものにしていく。

『学外協力者』

尾崎	舞子	（山口県立大学看護栄養学 B3 年）
縄田	涼佳	（山口県立大学看護栄養学 B3 年）
河本	瑞穂	（山口県立大学看護栄養学 B2 年）
廣本	理沙	（山口県立大学看護栄養学 B2 年）
深井	奈津美	（山口県立大学看護栄養学 B2 年）
平間	有里菜	（山口県立大学看護栄養学 B2 年）
甫水	友紀	（山口県立大学看護栄養学 B2 年）
向井	夕菜	（山口県立大学看護栄養学 B2 年）